生物はどのように同一とみなされるべきか

森元良太（北海道医療大学）

生物学では、生物種や集団、形態や形質といった、さまざまな対象の同一性と差異性を捉え、グループ化することが研究の出発点であり、また終着点であることもある。たとえば分類学者は生物種あるいは集団の時間的変化を調べ、さまざまな特徴をもとに分類体系や系統樹を作成するし、形態学者は生物の器官を比較し、それぞれの系統での器官の時間的変遷（器官の進化）を明らかにする。

だがその一方で、さまざまな生物学的対象の同一性を認識すること自体、生物学者のあいだで共通の基準があるわけではない。種問題をめぐる多岐にわたる論争は、種をひとまとめにする基準が一筋縄ではいかないことを物語っている。生物の形質だけをみればよいのか、歴史も踏まえるべきか、それだけでは不十分なのか、等々、議論は尽きない。また、共通祖先から同一であった形質をあらわす「相同性（homology）」という概念は種問題の論争にも登場するが、進化発生学では発生の観点を導入することにより、新たな様相を呈している。

こういった、さまざまな生物学的対象を同一だとみなすにはどうすればよいのだろうか。これは哲学でいうところの認識論の課題であり、また存在論とも深く関わっている。つまり、この問いを解き明かすには哲学の議論を避けることができない。そこで、本ワークショップでは、生物学においてさまざまな生物をどのように同じとみなすかについて、生物学と哲学という異なる観点から討論する。